

生物資源管理学科のルーツ：県短農業部の思い出

岩間 憲治

生物資源管理学科

滋賀県立大学(以下、県大)の前身は滋賀県立短期大学(以下、県短)である。そのキャンパスは彦根市と草津市に分かれ、その当時は4部、11学科の日本でも最大規模の短大であった。しかし、1995年に滋賀県立大学が発足すると、その1年後に看護部以外の部が廃止となり、2005年の看護部廃止とともにその姿を消した。

私の県大との関わりは県短時代にさかのぼる。県短農業部農業土木学科(草津キャンパス)では、学生実験の補助として私が所属する研究室の大学院生が非常勤助手を勤めており、毎週のように草津市へ出かけていた。当時、学部学生であった私は研究室の院生からそこでの様子を耳にし、短期大学でも農業を学ぶことの出来る点に新鮮な気持ちを感じていた。更に大学院に進学してからは自分の将来に関連して考えるようになり、一度は県短の様子を見てみたいと思うようになった。そして、博士後期課程に進むと非常勤助手・講師として毎週草津キャンパスを訪れることとなった。急に教員の端くれとして4、5歳若い短大生と相対することとなったが、意思を持って短大農業部を選択した学生の意欲に触発され、私自身も教育者としての自覚を持ち始めたことを記憶している。

博士後期課程も修了に近づきこれからどうしようかと思った矢先、縁があってそのまま短大に、更に既に設立が決まっていた県大の助手として採用されることとなった。短大の本部は彦根であるため、その辞令交付に向かう車の中で緊張気味の私に対して同じ立場であるはずの上町先生がどっしりと構えられていたのが印象的であった。

私自身、県短農業部での3年間でとても印象深かった。それはとにかく短大生や職員との心理的な距離がとても短かったことに起因する。非常勤講師の頃から、担当する実習では古い器具を手なずけるため結局は短大生と一緒に試行錯誤することとなり、卒論でも土壌採取など大きな作業の後は必ず夕食をともにして、色々語り合った。一方、気分転換に事務室を訪れては他学科の先生方や事務の方々と様々な情報を交換し、夕方になるとテニスに誘われることも多かった。更に、一週間に一度は体育館にて別の教職員に短大生も加わって9時頃までバレーボールに汗を流し、皆と夕食をともにした。大学院生だった時分よりはるかにコミュニケーションが密な空間がそこには存在していた。

さて、草津キャンパスの敷地内に農場があり、長年

にわたって水田として使用された日本の典型的な灰色低地土であった。このため、大学院当時の研究テーマであった粗間隙の観察に適した土壌試料が何時でも採取できるなど、私の研究環境としては最適な場所でもあった。現在、キャンパス跡地は一部を隣接する高校のグラウンドとして、その他を住宅街としてその姿が一変してしまった。一般的には都市は肥沃な平野部に位置することが多く、水田や畑利用に適したその周辺部の土地は、都市が発展するとともに住宅地へ変貌してしまう。しかし、一旦、宅地にかわるともう二度と優良な農地に戻ることはない。個人的には生産性の高い優良農地は日本にとって貴重な資源と考えるが、短大跡地を想うとそのような資源が今なお失われてしまうことはとても残念である。

さて、県大開学1年後に県短農業部が閉鎖されて、草津から彦根に一斉に引っ越したが、県短農業部のアットホームな雰囲気そのまま生物資源管理学科に引き継がれた。県大開学後20年経過し、短大時代の雰囲気は薄れつつあるが、それでも学生が気楽に研究室を訪ね、授業内容に関する質問や研究・進路、さらには様々な悩みを打ち明ける状況に至る所で見られる。また、新歓コンパなど学科主催の様々な催しなどで様々な回生が混合してざっくばらんに話し合える状況もしばしばである。

研究環境においても、平均して草津キャンパス当時と同等である。今でも、圃場実験施設内で水田を中心に採土するが、県大造成時の客土の影響からか開学当初はレキや様々な残渣などが混ざっていることもあり、水田の代表的な土壌とは言えなかった。畑地も土性が砂壤土を示す一方で開学時は貧栄養状態であり、いろいろな問題が見られた。ただし、圃場の技師の方の尽力もあり、このような土壌に関する様々な問題が軽減されつつある。一方、一度キャンパス外に目を向けると、南東部に一面に水田が広がっており、典型的な琵琶湖畔平野に広がる農村地域である。農業(排)水路網には様々なドンコ、ヨシノボリ、ドジョウなどの魚類や虫などの様々な昆虫、水棲生物が生息し、人間が介在する自然である里地・里山が未だに存在する。農業に関する様々な研究を進める上で適した立地と言える。県短農業部を根源とする生物資源管理学科にとっては、まさに「キャンパスは琵琶湖」ならぬ「キャンパスは琵琶湖集水域」である。

環境科学部が出来て20年経過したが、このような環境が今後も続くことを期待する。